

史料編纂所 「歴史資料の修復と研究

—中世の古文書と薩摩切子—

【展示概要】

○史料編纂所の組織とあゆみ、所蔵史料

○史料編纂所の出版物

○画像史料解析センターの近年の研究成果

- ・「倭寇図巻」と「抗倭図巻」
- ・落合左平次背旗
- ・古写真原版—横浜駅・長崎—



○小企画「歴史資料の修復と研究—中世の古文書と薩摩切子—」

「薩藩勝景百図」桜島

・『中院一品記』の修復

修復にともなう詳細調査にもとづき、書状の復元研究にも取り組みました。

・島津家文書「御文書」の修復

19世紀中頃、幕末から明治初年の限られた期間に鹿児島で製造された薩摩切子は、優れた技術と稀少性により、美術品として高く評価されています。修復中の「御文書」のうち29巻分は、軸端に赤色切子を用いていました。その軸端の復元品を展示します。



御文書「赤色切子軸端」

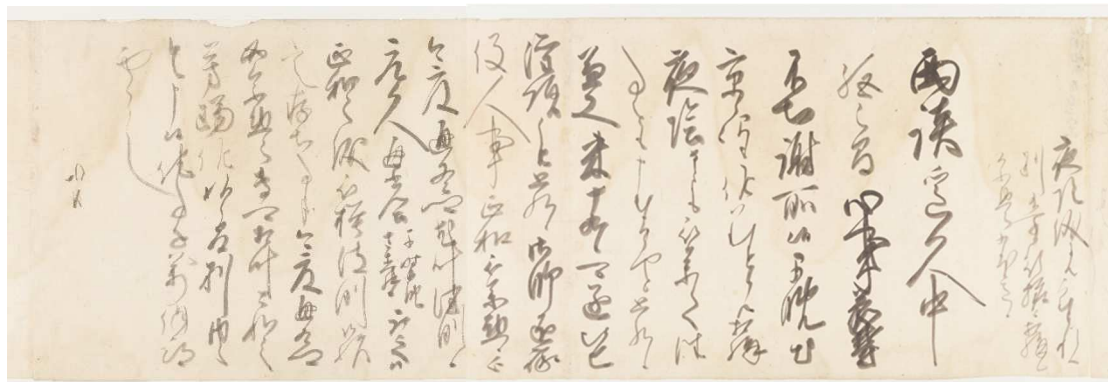
小口部分にもカットが施された軸端（右）は、1組のみ確認されている。

史料編纂所 1階 展示ホール・小会議室 2018年8月1日（水） 10:00～17:00

※展示は複製品または写真パネルです。

【小企画展示解説】

○『中院一品記』の修復 光厳院自筆書状 暦応二年（1339）二月～六月巻に貼り継ぎ



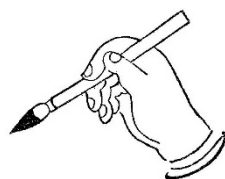
『中院一品記』は、南北朝時代の貴族・中院通冬（1315～63）の日記。中院家は村上源氏の一流で、大臣まで昇進する家柄であったが、南北朝争乱のなか通冬は、当主として多難の生涯を送った。その日記は、建武三年（延元元年：1336）二月から貞和五年（正平四年：1349）十二月に及び、成立間もない室町幕府や北朝の動向を知る重要史料である。

その自筆原本の多数を史料編纂所で所蔵するが、保存状態が悪く、現在の研究段階での検討に堪えず、将来にわたる保全のため、2013年度から3年間をかけて本格的な調査と修復を行った。1紙ごとの状態を整え、乱れた配列の順序を正して、なるべく当初の形に近いように調巻し、計11巻となった。この間の研究および成果公開により、史料としての重要性が再認識され、2017年には重要文化財に指定された。2018年6月には、他の諸機関に散在する原本断簡を集成し、紙背文書（日記裏面に残る文書）を含めて翻刻しなおした『大日本古記録』の上冊を刊行し、続冊の編纂を進めている。

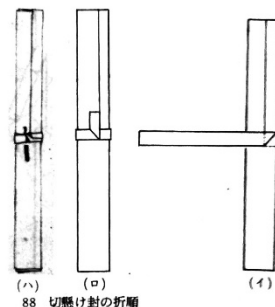
展示の光厳院自筆書状（宸翰）複製は、この修復時の料紙分析にもとづき、復元した和紙を調製し、コロタイプ印刷したものである。経年によるシミ・虫損などは取り除き、もとの書状が日記に貼り継がれる際になされた多少の切断部は復元し、文書としての原状に近い形としている。あわせて筆法の復元的な研究も行った。



『春日権現験記絵』よりトレース
(作図：鴈野佳世子)



尊円親王『入木抄』に付加された図
(『群書類従』28輯・雑部、八木書店)

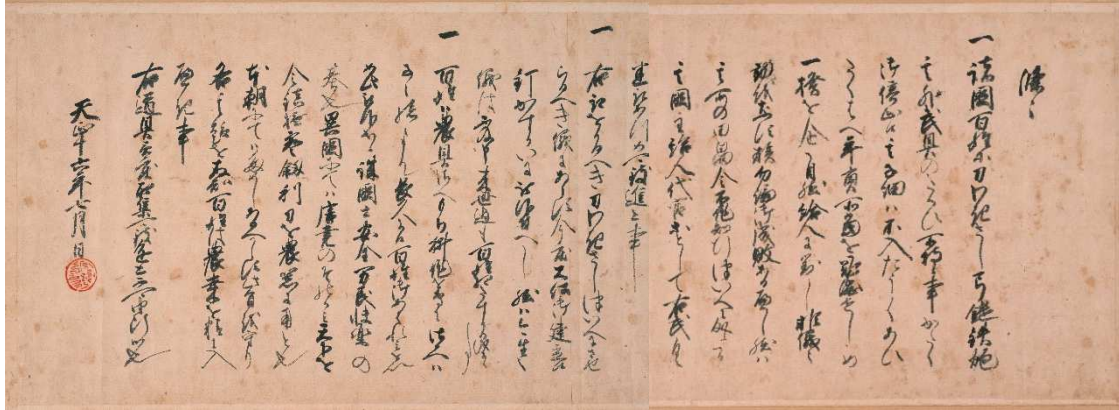


88 切懸け封の折順

『書の日本史』9（平凡社、1976年）

○島津家文書：「刀狩令」 豊臣秀吉掟書 天正十六年（1588）七月

「御文書 三十四通義久」[S 島津家文書-2-16]のうち 展示は復元和紙にコロタイプ印刷



史料編纂所のデータベース <http://wwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>

全巻のカラー画像：「所蔵史料目録データベース」→「御文書」＋「三十四通」などで検索。

翻刻（活字にしたもの）：『大日本古文書』家わけ十六・島津家文書之一、353号（1942年刊）

「古文書ユニオンカタログ」→「天正16年7月」で検索。

「電子くずし字字典」を使って、読めない漢字を検索してみよう。

本文2行目の行頭

其外

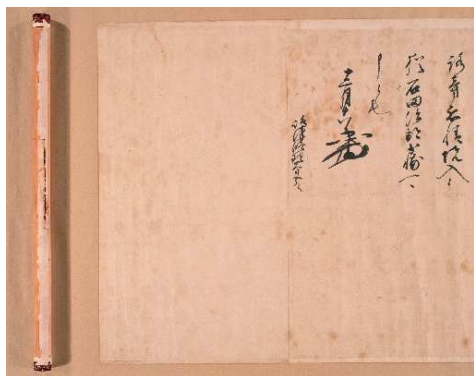


No	部首	文字	画像	類似検索	連携検索
1	042,024,007	其		其 其 其	其

検索結果：1件 検索式：文字=外

No	部首	文字	画像	類似検索	連携検索
1	036,025	外		外 哉 分 別 前	外

○島津家文書：「御文書」の切子軸端



「刀狩令」が貼り継がれている巻物の末尾

軸木の上下端に、赤いガラスが付けられている。島津斉彬の時代に製造されたとされる薩摩切子で、「御文書」238巻のうち29巻分に赤色切子の軸端が用いられている。修復中の「御文書」軸端には、破損したり、失われたものもある。赤色切子の復元品を(株)島津興業 薩摩ガラス工芸に制作を委嘱。展示はこの復元品。修理後には軸に取り付ける。

国宝「島津家文書」は、薩摩鹿兒島藩主・島津家に伝わった文書群で、平安時代末期から江戸時代に及ぶ総計15,133点を数える。二代藩主・光久の時代、慶安二年(1649)に最初の整理の記録があり、以後、段階的に、最重要とされた文書は手鑑(アルバム)7帖に、それに次ぐものは卷子「御文書」238巻に整理された(合計5,578通)。

史料編纂所は、1950年代に島津家から譲渡を受け、この史料群の整理・保全を図り、その価値を広めた結果として、2002年には国宝に指定されました。2015年から5年間の計画で、「御文書」のうち13巻の解装修理を実施し、紙質の調査なども行っている。

展示の「刀狩令」複製は、調査にもとづく復元和紙にコロタイプで印刷し、風合いの再現も試みたもの。今回はケース内での展示だが、教育・普及を目的とした利用も始めている。

ガラス製品の入手は、江戸時代前期より、長崎を通しての輸入が中心で、眼鏡は早くよりもたらされた。食器・薬瓶の需要も高く、幕末期になると、西洋の化学(舎密：せいみ)による実験・生産のため、酸に強いガラスが必要で、国産も試行された。

薩摩での本格的なガラス製造は、弘化三年(1846)に島津斉興が鹿兒島城下の中村に製薬館を創設した際、江戸から職人を招き寄せたことに始まる。

嘉永四年(1851)に島津斉彬が藩主となると、富国強兵・殖産興業政策がとられ、財政的な支援のもと、郊外別邸の磯には、製鉄(溶鉱炉・反射炉)をはじめとする工場群「集成館」が建造された。ガラス工場はその一つで、工場や船舶で用いるガラスに加え、高度な技術を要する色ガラスやカットガラスの製造にも成功した。

安政五年(1858)七月に斉彬は急逝し、集成館事業は縮小され、文久三年(1863)の薩英戦争で工場は炎上、明治初年までガラス製造の形跡があるものの、明治十年(1877)の西南戦争の頃には廃絶した。薩摩ガラスは、斉彬の事蹟と結びつけて記憶されることになった。

経典の軸端に水晶で荘厳することは古代より行われ、その趣向を模し、ガラスを軸端に用いることもあった。文政十一年(1828)に開業した江戸の硝子問屋・加賀屋久兵衛の引札では、嘉永二～同末年頃(1849～54)の第二版で、軸が取扱商品の一つとして描かれている。



硝子製法の訳書に押された島津斉彬の蔵書印 影写)